
メリークリスマス ~届けたいメッセージ~

葦桜 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メリークリスマス ～届けたいメッセージ～

【Nコード】

N1037J

【作者名】

葦桜 紫苑

【あらすじ】

メリークリスマス！！

クリスマス前の寒い夜、小さな男の子は、ずっと伝えたかった思いを握り締め、トナカイを探していた。だが見つけたトナカイは、人相も性格も悪く、しかも子供嫌い。

だがその男の子との出会いが、少しトナカイの気持ちを变えてゆく。

「つかまえた。」

そう言い男の子がしがみ付いた相手は、トナカイだった。沢山の大きな袋を積んだソリを引くトナカイ、普通のトナカイではない事は一目で分かる。

しがみ付かれたトナカイは、何が起こったのか分からず、一瞬動きを止めたが、直に状況を飲み込めたのが、一つため息を付いて体を震わせて男の子を振り落とした。

それでも男の子は諦めずにしがみ付いて来る、その度に振るい落とすトナカイ、男の子の姿も見ず立ち去ろうとするとしがみ付かれる、そのしつこいと言いたくなるほどに、同じ事を繰り返す男の子にイラつときたのか、蹴り飛ばしてやろうと、首だけを動かし男の子の姿を見た、そしてまたため息を付く。

頑として譲らないと言う眼をしていた。

「うつとーしーわー。」

町中に響き渡る大きな声で、怒鳴るように言うトナカイ。驚いたのか、男の子は目を大きく開き、絶対離そうとしなかった手も離してしまっている。

「なんつー生意気なガキだ、うつとうしいわ、こっちは忙しいんだ、あっち行け、しっしっ。」

大きい体に厳つい顔、普通のトナカイの何倍もあるうえに、性格も悪い。普通の子供だったら近づく所か、見ただけで泣き喚くだろう、でもこの男の子は、怒鳴り声にはビックリしたものの、恐れている様子は無かった、それがまたトナカイの感情を逆撫でする。

トナカイの前に立ち、真っ赤になった手で手紙を差し出す。落とさないように握り締めていたのか、グシャグシャになっていた、する様な男の子の眼に、呆れた様な、見下す様な目にも取れる目で、男の子を見下ろした。

「わざわざ届けなくても、こっちから回収に行くんだよ、これだからガキはめんどくせい。後ろの袋に入れる、ちゃんと届けてやるから。」

そう言われ手紙を袋の中に入れる、そして男の子はトナカイに一つ頭を下げて、トナカイとは反対方向へ歩き出した。

「なんつーませたガキだ。」

一歩歩いては振り向き、一歩歩いては振り向く、とぼとぼと歩く男の子の後姿が、どうしても気になってしまう。

「バカな事考えるなよ俺、忙しんだよこの季節は、寒いし寝てないし、死ぬほど扱き使われてるんだ、ガキの相手なんかしてられるか・
.....」

だが、目は男の子の背中を離してはいなかった、そしてため息を付く、もうこれ以上幸せは逃がしたくないから、ため息は付かないと心に誓いながら。

「おいガキ、送ってやるから乗れ。」

男の子は振り向いたが、首を横に振り、またお辞儀をし歩き出した。そしてトナカイの機嫌は見ても分かるように悪くなった。チリと澄み切った空気に鈴の音が響くと、トナカイは男の子の目の前にいた。

「ませガキ、勘違いするな、お前の為じゃない、このまま俺がお前を見捨てて仕事に戻って、お前が凍死したりなんだからして、死なれたら俺のせい見たいじゃないか、怒られるのは俺なんだよ、分かたら乗れ。」

突然現れたトナカイに、反論する事も出来ない位の言葉に、ただ頭を立てに振り、沢山の袋が乗ってあるソリに乗った。

「行くぞ、落ちないようにしっかりと捕まってるよ。」

「はい。」

冷たい空気に響く鈴の音、トナカイが一步一步歩くと、体とソリは宙に浮き、まるで空中に道があるかのように、トナカイは歩く。

「寒かったらそこにある毛布にでも包まってる。」

「はい、ありがとうございます。」

近くにあった毛布に包まり、冷え切った体を温める、上に行けば行くほど、空気は冷たく風は強い、耳は千切れるほど痛い、そんな事を忘れさせるほど、目を奪う光景が下に広がっていた。光り輝く大地、普通に生きていれば見ることの出来ない景色、空に輝く星

と同じぐらい美しい。

「何でこんな夜中に一人で出歩いたんだ。」

トナカイの質問に、少し微笑んで男の子は答えた。

「トナカイさんを、さがすため。」

「んな事は分かってる、わざわざ来なくても取りに行くんだ、嫌でもな。」

「ちよくせつ、渡したかったから。」

「家で待ってればよかっただろ。」

その質問には答えず、男の子は下に目を背けた。

「あいたかった。」

「まあどうでもいいけどな。」

トナカイは顔を背た、柄にも無く赤くなつた顔を見られない為に。

季節は冬、十二月はクリスマス、凍えるような季節に素敵なプレゼントを届けてくれるサンタさん。サンタさんとトナカイはこの時期が一番忙しい、真っ白に染まった町に、美しい鈴の音が響き渡れば、それはプレゼントを持ってきた、サンタさんとトナカイが町にやって来た証、良い子の皆は直に寝ようね、起きてると後回しにされた上に、忘れられる可能性があるから……。

「何をニヤニヤしてるんだい、そんなにあの子からの手紙が嬉しかった？」

「うるせい、サンタは黙ってプレゼントを配ってりゃいいんだよ。」

「まったく、相変わらず口が悪いなあ、何故あの子は恐がらなかったか、不思議でたまらない。」

「お前も相当悪い方だぞ。」

「まあいいさ、確かにあんなに暖かい手紙を貰ったら、心まで温かくなってニヤニヤしてしまうね。これで君の子供嫌いも治ればいいんだけど。」

「ガキは嫌いだ、自分勝手に生意気で……。」

サンタはクスクスと笑い地上の光を見た、明日の朝には、この町は子供たちの笑顔で溢れる、この仕事の何よりの遣り甲斐はそこにある、子供たちの欲を叶える、このトナカイはそれを嫌がっていたが、たまあに届く小さなメッセージは、悪くないと思っっているみたいだ。

「笑うな。」

「さあトナカイ、仕事を始めるよ、今日は一年で一番忙しく、一番素晴らしい日だ。」

「うるせえなあ、分かってるよ。」

体に当たる風は冷たく、体温をさらって行くが、サンタとトナカイ

イの心は、体をぼかぼかに温めるほど暖かった。

「ありがとう、本当にありがとう、今日はいままでで、いちばん幸せな一日だったよ。」

そう言い笑顔で手を振りながら、トナカイを見送った男の子。トナカイは振り向くことも無く空へと消えていった、素っ気無かったと思うが、それでも振り向くことが出来なかった。

今でもあの笑顔は忘れられない。

「だからガキは嫌いだ、俺の感情を勝手に動かすな。」

手紙は二通、一つはサンタに、そしてもう一つは………トナカイさんへ。

トナカイはサンタに言われ、しゅしゅ、でも少し嬉しそうに返事を書いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1037j/>

メリークリスマス ~届けたいメッセージ~

2011年1月16日08時23分発行